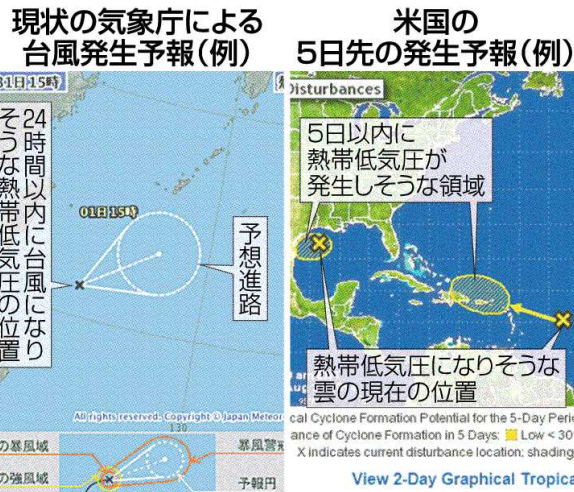


# 台風発生予報5日前から

## 気象庁、数年内に導入

気象庁が、台風の発生を予報する能力を大幅に向上させる準備を進めていることが26日、同庁への取材で分かった。現状の予報は発生が予想される1日前からしか情報が出ないが、新方式では最長5日前から分かる可能性がある。既に内部向けに試験的な利用を開始しており、一般向けの発表は数年以内の開始を目指す。日本は、沖縄や南九州など台風の発生から接近までの時間が短い地域も多い。早期警戒につながる、自治体の防災対応



に役立つであろう。気象庁は現在、台風の「卵」となる熱帯低気圧が発達し、24時間以内に台風の定義である「最大風速17・2以上の勢力」になると見込まれる場合に、進行方向や速度、中心気圧などの情報を発表している。

気象庁気象研究所によると、予報官が衛星画像で雲の形の変化などを見て、熱帯低気圧の発達や衰退を判断する。作業指針があり、コンピューターによる予想も参考にしている部分も大きいという。

新方式では、コンピューターによる「アンサンブル予報」と呼ぶ手法を使う。気温などの観測値から、わざと少しずつ増減させたデータを数式に入力して

多数の予測を出す。全ての結果を総合して、5日以内に台風になる確率を判定する。

気象庁が独自に出した結果だけでなく、米海洋大気局(NOAA)など海外の最大3気象機関によるアンサンブル予報も活用。5日のうち、特に直近の2日間については、衛星画像で解析した熱帯低気圧の情報も組み合わせ精度を向上させる。

一般向けには、5日以内に台風が発生したり、移動したりすると見込まれる領域を地図上に示す形となりそうだ。さらに「発生確率・高」「確率・中」といった表現で確率も示す。

研究を担った気象研究所の山口宗彦主任研究官は「同様の発生予報は海外の気象機関にもあり、日本は遅れている。一般の人が見て混乱しないような情報の出し方を考えたい」と話している。

2019年1月27日付 1面

むづかしい漢字とことば

気象庁(きしょうちょう) 大幅(おおはば) 既(すで)に 一般(いっばん) 地域(ちいき) 警戒(けいかい) 卵(たまご) 見込(みこ)まれる 衰退(すいたい) 指針(ししん) = 目指す方向。方針 頼(たよ)って 呼(よ)ぶ 観測値(かんそくち) 解析(かいせき) = 物事を細かく分けて、理論的に調べること 領域(りょういき) = 関係する範囲(はんい) 担(にな)った 遅(おく)れ 混乱(こんらん)



【問1】 台風の発生を予報する能力を大幅に向上させる準備を進めているのはどこでしょう。

【問2】 現状では台風発生の予報はいつからできるのでしょうか。

【問3】 台風発生の予報が最長5日前から一般向けに発表されるのはいつごろからでしょう。

【問4】 台風発生を予報する能力が向上されることでどんなことが期待されるでしょう。

【調べてみよう】 日本付近で今年度発生した台風について調べてみよう。

【問1】台風の発生を予報する能力を大幅に向上させる準備を進めているのはどこでしょう。

気象庁

【問2】現状では台風発生の予報はいつからできるのでしょうか。

台風発生が予想される1日前

【問3】台風発生の予報が最長5日前から一般向けに発表されるのはいつごろからでしょう。

数年以内

【問4】台風発生を予報する能力が向上されることでどんなことが期待されるでしょう。

早期警戒につながり、自治体の防災対応に役立つ

【調べてみよう】日本付近で今年度発生した台風について調べてみよう。